

第4回俳句賞「25」選考会報告

第4回俳句賞「25」のダイジェスト版となります。書き起こしではございませんのでご承知ください。

第4回俳句賞「25」選考会は2021年1月30日（土）に行われた。新型コロナウイルス拡大による東京都の緊急事態宣言を受け、選考会は遠藤委員と実行委員会メンバーのみで行い、岸本委員と高柳委員はオンラインツールを用いての参加となった。また、選考会は十分な感染症対策の下行われた。

予選の結果は以下の通りとなった。

第4回俳句賞「25」 集計結果

(1席4点・2席3点・3席2点・4席1点で計算)

順位	番号	表題	遠藤委員	岸本委員	高柳委員	合計得点
1	14	星の図鑑	4	4	4	<u>12</u>
	31	飛べぬ羽	3	3	3	<u>9</u>
2	1	静かなる	2	2		<u>4</u>
3	11	小舟			2	<u>2</u>
4	6	いつも空は	1			<u>1</u>
	12	こちらキッチン探検隊			1	<u>1</u>
	22	極月		1		<u>1</u>

*31番「飛べぬ羽」は、応募締切後に代表生徒より「既発表句が含まれていたため棄権」との連絡を受けました。よって連作としては失格としつつ、当該既発表句以外の24句は一句入選の対象内とさせていただきます。

遠藤委員の4席6「いつも空は」

(遠藤委員) 若々しく瑞々しい世界観。25句が連動している。実感から生まれた抒情性が強み。素材そのままの句や季語を再考する余地のある句があり、4席とした。「春光や水筒に傷きらきらと」はとても素直な句。水筒のきらめきに目を止めたのが良かった。「あの辺りかと語り合う天の川」自分たちと天の川との距離感の広がり。遙けさへの憧憬を感じる。「ビー玉の中心草の穂の見ゆる」「草の穂」に見立てたことを断定する工夫が見られた。「冬だまた私の知らぬ冬がきた」この年代でしか詠めないときめきを映している。「また」に重層的な構造を感じさせる。「前ならえ直れ休めよ鰯雲」は「起立礼着席青葉風過ぎた/神野紗希」を思わせ、類想を指摘されるリスクがあるかもしれない。

(高柳委員) 銜いのないすがすがしい作品だった。「冬だまた私の知らぬ冬がきた」の冬のきいんと冷えた寒さが極まる感じが、作者にとって未知の不安感が冬とよく合っている。

抽象的な心象だけで描ききった挑戦作。「読み返す生徒心得今日の秋」は季節の移ろいと、自分の心の改まりを自然に重ねた点が巧み。総じて計らいや作為の無い自然さが魅力だった。

(岸本委員) 「読み返す生徒心得今日の秋」が最も良いと思った。「神域の心得読むや花の下/高浜虚子」があるが、現代において生徒心得を読み返すのは新鮮さがある。「春光や水筒に傷きらきらと」「木苺の種かみ砕く朝まだき」「盆踊りただただ手足滑らせる」等、対象へのアプローチが情景の上でも心象に対しても詳細にできている。時候・天文などの大きな季語との取り合わせの句が多いが、よりきめ細かな季語により具象性を持たせるとよい。

高柳委員の4席 12「こちらキッチン探検隊」

(高柳委員) テーマ性が明確な作品。タイトルにユーモアがある。「台所俳句」に終わるのではなく、現代のキッチンが見えてくる。「春雨や酢飯の味見もそもそと」春雨が酢飯の質感によく合う。「もそもそと」は酢飯の描写として説得力があった。「揚げ油かためる父の夜長かな」は季語から油を固めるのに時間がかかっている様子を感じられ、おかしみのある句。「終戦日の空になきだす薬罐かな」「十七の春愁サイフォンのしずく」も取り合わせの句として良く出来ている。課題は、季語+キッチンの作り方がパターン化していること。食材の季語を詠み込むなどの工夫が求められる。「ガスコンロの火は小さめに楓の芽」は助詞の「は」を「を」とする、「岩塩の割れ目はピンク小鳥来る」の「割れ目」、「駱駝」が茶器の柄であることを言わずに表現した「花冷えや中国茶器をゆく駱駝」などに推敲の余地が見られた。

(岸本委員) この作品の特徴は、台所にある様々なモノをしっかりと描写したこと。「十七の春愁サイフォンのしずく」「サバ缶が四つ遅日のパントリー」など、モノをしっかりと描写していた。加えて季語の選び方も良い。「ガスコンロの火は小さめに楓の芽」コンロの描写から窓の外の楓の芽に小さな飛躍がある。「取れかけのラップそのまま祭笛」どこからか祭りの笛が聴こえてくるという情景。「固まった砂糖ほぐせば冬かもめ」は白いイメージの繋がりか。「星月夜ハウルの城にIH」「出汁の香のしみたミトンや冬銀河」など、飛躍のある取り合わせが見られるが、一句一句を見ると説得力があり、完成度が高い。評価の分かれ目は、25句が台所を描いた句で統一されていること。互いの句の魅力を打ち消し合っているのではないか。季語も含めて俳諧味のある作品だった。

(遠藤委員) 取り合わせに魅力のある作品だが、どこか似た印象の句が多い気がした。「花冷えや中国茶器をゆく駱駝」は「駱駝」は茶器に描かれた絵だと読み取ることは出来るので、良い表現だと思った。「固まった砂糖ほぐせば冬かもめ」には詩的な飛躍がある。全てをキッチンの中の情景でまとめた力は買うが、必然性を今一つ感じられなかった。

岸本委員の4席 22「極月」

(岸本委員) 際立って良い句がいくつかあった。「城跡に立つや数多の屋根へ雪」は「へ」

の助詞が効いていて、雪の降る動きが表現されている。「**室外機どろろと回る開戦日**」の「どろろ」という表現に室外機の質感がある。「**紙袋撫づれば鯛焼の鱗**」紙袋ごと鯛焼を撫でる時の、鱗の凹凸がよく分かる。「**五千元持つて一人のクリスマス**」クリスマスの幸福感と一人の寂しさが入り混じる。「**最終電車近し聖菓のショーケース**」「**職員用玄関狭し松飾る**」「**六人のキッチン狭し餅搗機**」などユーモラスな句も多かった。目の前のものをしっかり描く姿勢を評価した。

(高柳委員) 特に良い句は「**紙袋撫づれば鯛焼の鱗**」「**城跡に立つや数多の屋根へ雪**」。『極月』という題に沿って12月の出来事を並べるという構成が良い。しかし、ところどころ題材の重なりが見られた。例えば「**制服のまま飯食べて柚子湯待つ**」と「**柚子風呂の柚子に重力無いらしく**」など。「**六人のキッチン狭し餅搗機**」餅つき機を出してキッチンが狭くなったという展開が良い。助詞「の」は「に」の方が良いのではないか。この句も「**職員用玄関狭し松飾る**」と「狭い」という把握が重なったか。連作としては異なる題材、表現を用いた句によって展開を生みたい。

(遠藤委員) 12月に限定し、生活の中で目に付く場面を素材に取った作品。それ故かわざわざ詠まなくても良いかと感じる句もあった。惹かれた句も多く「**牧場に座りて冬晴を撮りぬ**」「**落葉焚畑に垂直なシャベル**」「**紙袋撫づれば鯛焼の鱗**」など。鯛焼の句はよく見ていて感心。鯛焼の温かさに紙袋が湿り、少し鱗が浮かび上がることもある。「**城跡に立つや数多の屋根へ雪**」は俯瞰したような景色で、雪景色だからこそ詠める句。全体的に堅実に出来ているが、情景をそのまま詠んだ句も多かった。

高得点句以外にも、惜しくも得点は逃したが、次点として選考委員の評価を得た三作品を取り扱った。

7 「押した鍵盤」

(高柳委員) 「**キャタピラは遅い九月を踏んでゆく**」の「遅い九月」は残暑か。キャタピラが動いている様子に残暑を感じたことを、取り合わせではなく、キャタピラが月そのものを踏むと捉えた面白さ。「**稲刈や首のほくろに日の当たる**」素朴な写実の句。稲刈をしている人を見るとほくろが見えて、秋の日差しが当たっている。「**駅前をぼとりぼとりと夜学生**」は「ぼとりぼとり」という水が滴るようなオノマトペに夜学生の疲労感や足取りの重さが感じられた。個性的な連作で、作品の方向性がバラバラに見える点が気になったが、自分の個性を大切に磨いてほしい。

(岸本委員) 「**むつごろうの古き巣穴の白さかな**」は泥を掘って作った巣穴の土が古びて白っぽくなっているのか。「**長閑さや賽銭箱の前に立つ**」は賽銭を入れるでもなく、賽銭箱の前に立っただけで長閑さを感じているとぼけた良さのある句。「**コスモスが咲いて柱の軋むかな**」家の周りのコスモスの揺れの波動で柱が軋むのかなと思いました。「**病棟を移る背中や青蜜柑**」の病人の後ろ姿と青蜜柑の取り合わせ。「**秋麗に鸚哥の脚の鱗かな**」

質感がよく表現されている。「いちめんの枯葉の迫る車かな」の車に迫る枯葉や「自転車に浅く座った冬が来る」の「浅く座った」「作業場の短き布の炬燵かな」の短い布、「瓶詰の雪やホテルの化粧室」の「瓶詰の雪」など、こだわりを感じる句材も多い。それぞれの句のこだわりの強さが連作全体のアンサンブルとしては課題となっている。

(遠藤委員) 綺麗にまとめるのではなく、自分の言葉で表現しようとしたこだわりを感じる25句。押し通すような表現に惹かれるが、無理に感じられる部分もある。口語・文語を両立させる文体の勢いは、これからの俳句の詠み方としてあり得ると感じた。好きな句は「長閑さや賽銭箱の前に立つ」「むつごろうの古き巣穴の白さかな」。「駅前をぼとりぼとりと夜学生」は自分の感覚を信じたオノマトペ。「キャタピラは遅い九月を踏んでゆく」の「遅い九月」の感覚に惹かれる。「初時雨押した鍵盤が戻らぬ」は、「初時雨」で良いのか気になった。魅力的で果敢な挑戦だと感じ、こういった段階を踏んで個性が育ってゆくものだと思った。

16「祈り」

(高柳委員) 東日本大震災やコロナ禍に立脚した作品だと思った。コロナウイルスを題材とした作品は応募作品の中にもいくつか見られたが、「コロナウイルスうつらぬように袋掛」は、ものの見方に余裕がある。袋掛をしたところで果物にウイルスがうつらないわけでもなく、ウイルスがうつらないために袋掛をしているわけではないが、マスクとは人間の袋掛にも見え、皆がマスクをしている光景へのアイロニカルな視点がある。「花ミモザあの日流れた船かとも」は、震災で流された船とも、それを離れてミモザの向こうの雲などを船に見立てているとも読める。ミモザに祈りの気持ちが込められている。「風薫るマスクはずしてしまいたい」「祈りとは忘れないこと終戦日」などはややメッセージが直球すぎたか。世間の言葉とは異なる方向を見ることも俳人には必要。ストレートな表現が惜しい。

(岸本委員) 社会的なテーマについての力作が並んだ。「海温の上昇若布ざわざわと」和布の現場が見えてくる。季語も「花ミモザあの日流れた船かとも」、「浜木綿や鳥の死骸にプラのごみ」の現実と相對するような美しい「花ミモザ」「浜木綿」、「飢餓の子の大き眼や石榴の実」の「柘榴の実」の切なさなどが巧かった。全体的に力作が多かったが、社会的なテーマが並び、全体的に社会詠のメドレーのような印象を受けるのが悩ましかった。色々なテーマがあったことが、かえって読者からすると惜しかった。

(遠藤委員) 三十一篇中とても印象的な作品だった。それぞれの作者がメッセージや使命感を持って正面から詠んでいる。リアルタイムで今の地球で起きている自然災害や人災などをテーマに「祈り」としよう、と作品を作ったことはよく分かる。他のお二人（の先生）も仰る通りややストレート過ぎる印象を受けたが、このような姿勢で25句作った力作であると評価したい。「道端の慰霊の花の陽炎える」「海温の上昇若布ざわざわと」はしっかりできている。「盂蘭盆や隣の墓は流されて」「飢餓の子の大き眼や石榴の実」、「被災地や餅搗く人の手の厚さ」の手の厚みに人と人との連帯が込められている。広島忌や第二

次世界大戦など色々な題材を取り上げ過ぎたかと思うが、全て詠もうという姿勢を感じられた。

19「単線の街」

(高柳委員) 一句の主人公が立ち上がってくる句が多かった。「謝れば済むこと多し胡瓜揉」句の主体がよく立ち上がってくる。ふてぶてしい主体を立ち上げたことに魅力がある。謝罪を繰り返すうちに謝罪が記号化する様子が現代的。「胡瓜揉み」という季語がふてぶてしさを支えている。「朧月人権作文書き直す」夜を徹して、表現に気を配らねばならない人権作文に精一杯取り組んでいる自分。「ちちははの喧騒遠く董草」は家庭内の不和を遠くに眺めている主体。「一輪車とほれるほどに葡萄枯る」は写実の句だが、葡萄蔓が枯れた隙間が、一輪車が通れるほどだという点が細やかな感覚が生きていた。

(岸本委員) 感覚的な面白さのある作品だった。「荷物みな身を締めつけて蝌蚪生まる」荷物が腕や背中を締め付けているという状況と「蝌蚪生まる」は何の関係もないが、感覚的な面白さがある。「噴水の穴ももいろに錆びてをり」噴水の金属が錆びているのだろう。「ももいろ」は少しピンとこなかったが、面白いと思った。「炎天や老人の持つ拡声器」どんな老人だろう。拡声器を持って世の中に何か訴えかけているのか。「肖像の蓄へし髭芭蕉の葉」髭を蓄えた肖像画があり、庭の芭蕉の葉が垂れている面白い景。「聖みな目を瞑りたる大花野」過去の聖たちが花野を通り、立ち止まって目を瞑っていたのだろうと想像させる。「家庭科の班決め終へて野分雲」六時間目、台風が近づいて、班を決めてさあ早く帰ろうねという場面か。かなり奥行きが深い句がいくつか見られた。

(遠藤先生) 題材や切り取り方に類想の無い句が多かった。今までに詠まれていない情景や感覚を見つけて詠む喜びを感じさせる新鮮な作品だった。感覚的だが、詠んでいることは实景に即していた。「朧月人権作文書き直す」はここに「朧月」が来るのか、「噴水の穴ももいろに錆びてをり」は錆びを「ももいろ」と表現するのかと感心した。素直に詠まれている「一輪車とほれるほどに葡萄枯る」「冬銀河以外に何もない故郷」、「聖みな目を瞑りたる大花野」のタイムスリップしたような時空など。詠まれていないものをこんな風に詠んで、この季語をこんな風に置くのかと感心する句が多かったが、その点に走りすぎていた。魅力的ではあるが、私はきちんと評価できるのかと思うと点を入れ難かった。

続いて、高得点作品の検討が行われた。

高柳委員の3席 11「小舟」

(高柳委員) 全体的に見ると「や」「かな」「けり」などの切字がほとんど使われていない。「や」を使った句が二句、「かな」が一句。ここまで切字を使わず、自分たちの文体

を作りだしているところに惹かれた。「助手席を倒し春三日月に雲」「子を宿す猫の波打つ腹と寝る」などは、散文ギリギリのところで踏みとどまって韻律を確保している。それが作者の呼吸というか、体温に合っている。「助手席を倒し春三日月に雲」助手席を倒してひと眠りしようかなというところに夜空の三日月にかかった雲が見えた。「や」「かな」「けり」を使わず、作者の肉体を通した言葉で表現しようという姿勢を感じた。「子を宿す猫の波打つ腹と寝る」の季題は「孕み猫」だが、「波打つ腹と寝る」と表現に猫の体温を感じさせる。身体で俳句にぶつかっている。「枯野道はちみつ飴の溶けてゆく」は普通に書くと「口中にはちみつ飴や枯野道」となる。この句は「口中」を省いたことで少し分かりづらくはなるが、枯野道の寒々しさとはちみつ飴を溶かす自身の体温のコントラストが際立っている。「綿虫や仮設トイレのドアかたし」は詩情からはほど遠い「仮設トイレ」という題材を、「綿虫」という季語や仮設トイレをしっかりと描くことで、何かしらの詩情を宿らせようとしている。切字や取り合わせなどのセオリーを一旦置いておいて、自分の肉体で対象や俳句形式と向き合おうという姿勢を感じた。

(岸本委員) 面白かった句は「かさぶたを剥がして雨のねぢあやめ」。かさぶたを剥がすことと雨の中のねぢあやめの取り合わせ。「子を宿す猫の波打つ腹と寝る」も面白いが、「腹と寝る」の部分は作者と猫が寝ているのか、その関係性が少し分かりづらかった。「降る光飛魚の背の深さまで」は美しい。海の浅い所を泳ぐ飛魚の背中に、日の光が海の中を通して届いている。「竜胆の湧き立つ墓に名の太し」の「竜胆の湧き立つ」という表現の力強さ。普通は「名前が太い」とは言わないが、竜胆が湧き立つという感覚と、墓に刻まれた名前が太いという感覚はよく分かった。かなり独特だったのは「負け終へて掬ぶ泉を揺らすこゑ」。「負け終へて」という表現が気になった。細かいようだが「教会にひらくオリーブ風を待つ」はオリーブの花が開いたということだろう。「ケチャップを振り下ろすたび秋思かな」「振り下ろす」と言うとき普通刀などの長いモノを思い浮かべるが、ケチャップを振り下ろすこともあるだろう。「綿虫や仮設トイレのドアかたし」は凄く面白いが、「ドアかたし」はノブや蝶番が固いと読めばいいのか、引き戸が硬いのか。少し引っかかる。引っかかりが心地良い時があれば、完成度があと一步と感ずることもあった。「冬の梅ほころぶ街よ幾星霜」は「幾星霜」という言葉が一句に溶け込んでいないと感じた。言葉の尖っているところが面白いと感ずる時と、表現がこなれていないと感ずる時があったので、やや惜しかった。

(遠藤委員) 作者の皆さんは、自分たちは俳句を作る作家で、自分たちの作品を出そうという意識があるのかなと感じた。その点は評価したい。独自の印象を強めている。助詞や表現にねじれを入れていて、意味を韜晦させて、それを詩にしようという感じがした。それが魅力であるが、それを魅力だと押し切るには至っていない。少し表現がこなれていない、くどいとも感じたが、それがこの作品の魅力で個性だと思った。季語と季語以外の部分が機能しているかギリギリの作品があり、狭いストライクゾーンを狙っているかのような作品があって、それがこの25句の個性を作っていると感じた。「子を宿す猫の波打つ腹と寝る」はよく分かる。「かさぶたを剥がして雨のねぢあやめ」には意味の繋がらない良

さがある。「五日目の日記を開き雛あられ」はなぜここに「五日目の日記」が出て来るの？という感じがする。「降る光飛魚の背の深さまで」は美しい。言葉で作り上げた詩の世界。「枯野道はちみつ飴の溶けてゆく」も好きだった。あまり意味に落ちない、強引さに惹かれるものがあった。

岸本委員・遠藤委員の3席 1「静かなる」

(岸本委員) この作品の特徴は、言葉の流れが滑らかで読みやすいこと。「長閑さや遊覧船のかたき席」は滑らかな言葉の流れに加えて、「遊覧船のかたき席」とモノをきちんと捉えている。「向日葵の影伸び来たる豊かな」、「屋根裏の小さき窓や台風来」は台風の接近の雰囲気が出ている。「防犯カメラは枯木道のみ映し」も面白い。「夙に見る峰よきかたち初比叡」はお手本のよう。「あかあかと雪を踏みをる鳩の足」は一本調子だが、言葉に無理をさせない句。「蝌蚪の尾を透け流れゆく塵芥」「透け流れゆく」が少し分かりづらいが、水底の蝌蚪の尾に水に漂う塵が透けている景だと思う。「卒業子大き袋を抱へけり」は卒業式の荷物だろう。「野球部のこゑをとほくに桜かな」「夏近しジャングルジムに雨しづく」などのように、詠みやすく作ってある点を評価した。

(遠藤委員) 題名『静かなる』が25句全体のトーンを表していた。違う傾向の句もあるが上手く溶け合っていて、それぞれの個性を大切に並べられた25句だった。派手な句というわけではないが、それぞれの句の感情がうまく詩になっていた。言葉の質が高いと感じた。「宇宙より塵の降り頃水温む」のある種の造語の大きさに惹かれた。「夏風邪の空が途方もなく深い」は口語がとても生きていて、途方もなさの実感がストレートで普遍的。「どこまでが夢どこからがヒヤシンス」は「ヒヤシンス」という季語がよい。「日の当たる小屋の白塗り葡萄狩」色や質感を細やかに詠んでいた。写実性に優れた一枚の絵を見ているかのようだった。「一人上がれば双六の紙薄き」はさり気ないが、双六をこう詠んだかと思心した。「金蠅や机をどんと手が叩き」これは助詞の使い方が上手い。「手が」という表現によって手元がクローズアップされている。素材をいじくり回すのではなく、素直に共感を覚える句が多かった。「新宿はひかりの数多受験生」「父親に似て硬き髪洗ひけり」「夏近しジャングルジムに雨しづく」など。ずっと心に響いてきた。

(高柳委員) 「金蠅や机をどんと手が叩き」ドキッとするような「机をどんと手が叩き」というフレーズは諍いなどをイメージさせるが、「金蠅や」でああ蠅を叩いたのかと分かる。この感情を抑えた、むやみにドラマチックにしない淡白さがこの25句の持ち味。「父親に似て硬き髪洗ひけり」や「日の当たる小屋の白塗り葡萄狩」。後者は「日の当たる白塗りの小屋葡萄狩」の方が良いか。「一人上がれば双六の紙薄き」双六で紙の薄さに注目することは少ない。なんとなく座が冷めた感じがする。薄味の句が続く中に「うつむいてなすすべもなし冬茜」は少し強い感じがした。感情を抑えた句が多い中でこういう句があるのは上手い。「どこまでが夢どこからがヒヤシンス」「夏近しジャングルジムに雨しづく」はやや類想感があった。「白猫の潜りてゆける椿かな」は何か掴んでいる感じはあったが、「ゆける」という流し方はさらっと流してしまったと感じた。白猫の何がくぐって

いったのか、などもう少し踏みとどまって（書いて）ほしかった。

（岸本委員）「白猫の腹ばい潜る」とかね。

（高柳委員）そうですね、もう少しなにか目を利かせられたのではないかというところ。

続いて、既発表作品を含んでいたため失格とはしつつ、高得点を得たため 31『飛べぬ羽』についても取り扱う。

高柳委員・岸本委員・遠藤委員の 2 席 31「飛べぬ羽」

（高柳委員）大胆なようで精緻さも持っているチーム。「鴨鳴けば曙杉の降りしきる」メタセコイアですよね。細やかな感覚が良いと思った。関係のない二つのものを関連させる方式。鴨の声がして、メタセコイアの落葉が降りしきる。冬の水辺の風景がよく描けていると思いました。「小児科に天使の時計春休」色々な病院の景は詠まれるが、天使の時計を詠んだか、と。病院で診察を受ける子供たちと、時計の天使が重なり合う。春休みなので、子供も治療に専念できるのではないか。風景の切り取り方が上手い。「山茶花はむかしがたりのやうに散る」の「むかしがたりのやうに散る」や、「家ぢゆうの花に倦みけりカーペット」の「家ぢゆうの花に倦」むというのは主観的で大胆な表現だが、成功しているのではないか。季語の実態を捉えている。あまりマイナスの句が無いという点でも、この作品を評価した。

（岸本委員）高柳先生の評の中で「風景」という言葉が出たが、確かに風景の作り方が上手いと思った。「上向きの蛇口いくつか小鳥来る」「蛇口」と「小鳥来る」の取り合わせの句は既にあるが、「上向きの蛇口」がちらほらあるところまで踏み込んだ点が良い。

「陸に置く舟あたたかし草の花」は陸に引き上げた舟と草の花の取り合わせ。「あたたかし」は少し主観的なものが入っている。「家ぢゆうの花に倦みけりカーペット」家の中にたくさんの花があり、カーペットも花柄なのかもしれない。そんな家の中の風景だろうか。独特な世界観。感心したのは「図書館に自転車二台かたつむり」。「図書館に自転車二台」まではよくある景だが、「かたつむり」という季語まではなかなか行けない。地味だが良い句。「死火山の麓の平家蛍かな」これは上手い句。「死火山」「麓」「平家蛍」という展開が自然体で広がりがある。「袂より風の生まるる流灯会」「木がいつぼん伐られてみたり休暇明」は既に詠まれた景の延長線という印象を受けたが、図抜けた句が多かった。全体として完成度の高い作品だった。

（遠藤委員）一読して、神経が行き届いていて上手いと感じたが、上手さに終わらない良質な世界観がある。過剰な表現を排し、精緻な句が多い。俳句を作ることがかなり身につけていて、選び抜かれた言葉で 17 音を紡いでいる。無難な句もいくつか見受けられ、迷って 2 席とした。「鴨鳴けば曙杉の降りしきる」は井の頭公園のような景を思い浮かべ、空間が広がると感じた。「東京を隠す雨なり冷奴」は夕立をきっぱり表現していて面白い。王道で正統な世界観だけれども魅力だった「陸に置く舟あたたかし草の花」「野遊や真白

きものは飛びやすき」「青嵐牛の乳房のどつさり」となどは既に詠まれている視点かもしれないが、力があると感じさせられた。詩情の世界に踏み込んだ「**穠田の光より鳥生まれけり**」「**真白き陽かれあしはらの上澄みに**」「**夏の蝶あるいは碧き葉の過ぎて**」などは、繊細に言葉を組み立てていると感じた。

高柳委員・岸本委員・遠藤委員の1席 14「星の図鑑」

(高柳委員) こんなに点が重なることがあるんですね、びっくりしました(笑)。全く違う俳句に対する考え方を持つ三人が1席をつけるのは凄いこと。モノに即して詩情を出すという俳句的な手法に即していることは、「**空き瓶のうすぐもりより蝶生まる**」によく表れている。飲み物が残った「**空き瓶のうすぐもり**」を捉えており、モノを捉えることに終わるのではなく、そこから一步踏み込んでいる。蝶が生まれた、と捉えたのは主観のはたらしき。モノを捉えつつ、詩を宿らせるという基本がしっかりと出来ていた。「**東京や雨の聖樹に肩触れて**」は「肩当たり」では無いのがよかった。クリスマスの東京はかなり密集して、押し合いへし合いしている。「触れて」と優しく描いたことで、東京に対する嫌悪感を示すのではなく、そんな東京を受け入れている。句のベクトルが一方通行にならない点が良かった。「**知らぬ草ふたすぢ混じるうまごやし**」クローバーを束ねて誰かに送ろうとしたのか。ただのクローバーの花束だが、知らない草がふたすぢ混じっていると言うと抒情が生まれる。一緒にむしられてしまった草の哀れさを感じられる。「**鉛筆は刃に痩せて椎の花**」「**こんなにも兄のはるけき泳ぎかな**」「**桃の香の中にピアノの古びけり**」など、しっかりモノを描きつつ、情感が込められている。全体的に力のある作者が揃い、その実力を遺憾なく発揮できていると感じた。

(岸本委員) 特に好きな句が「**塵取りにうっすらと水白木槿**」庭の軒下に置きっぱなしの塵取りにうっすらと水が溜まっていて、そんな景と白木槿の取り合わせ。身近な風景を美しく描いている。俳句年鑑の100句選に取った「**雨水のたまるちりとり沈丁花**」橋本小たか」という句がある。一方は「**雨水のたまるちりとり**」と「**沈丁花**」。もう一方は「**塵取りにうっすらと水**」が溜まる様子と「**白木槿**」。「**沈丁花**」の句はモノだけをくっきりと詠んだ作品だが、今回の句は「**うっすらと**」という表現や「**白木槿**」という季語に情感が表れている。「**はるかなるもの束ねんと風船売**」には感心した。「**はるかなるもの束ねん**」というと抽象的になりがちだが、この風船売は魔法使いなのか夢を売っているのか、と想像すると面白くなる。「**鉛筆は刃に痩せて椎の花**」は少し古い青春の感覚があるが、「**椎の花**」が上手い。「**自画像に髭すこし足す青嵐**」絵に描いたような青春だが納得できた。「**こんなにも兄のはるけき泳ぎかな**」私などは「**太陽の季節**」¹を勝手に想像した(笑)。「**冷やかやさはさと花踏んできて**」には驚いた。この句の主たる季語は「**冷やかや**」で、「**花**」は秋の草花。草花を「**さはさと**」踏みながら感じる冷やかやさもあるだろう。「**東京や雨の聖樹に肩触れて**」は31番『**飛べぬ羽**』の「**東京を隠す雨なり冷奴**」の俳諧味と比較して、より抒情的な句。うるうるとした青春がところどころに顔を出す作品であった。

(遠藤委員) 作品の幅広さを感じたが、25句のまとまりもあった。安定感のある句と大胆な句のバランスがとれていた。連作を応募する際には大切なこと。「あはき雪濃き雪のあり初詣」風景の輪郭をおぼろげにしてゆく雪の降り様を描写し、雪に初詣を重ねた点を評価したい。「温室が欠伸のやうに続きけり」の見立て。「続きけり」から一人の人物が温室の中を歩いている様子が見えてきて、見立てが実感を伴っている。「大いなる闇あり女王蜂と呼ぶ」の寓話的な意味深長さ。「空き瓶のうすぐもりより蝶生まる」やや濁った「空き瓶のうすぐもり」の確かな描写から「蝶生まる」への展開。いのちが持つ薄暗さを感じた。「はるかなるもの束ねんと風船売」「こんなにも兄のはるけき泳ぎかな」は「はるか」という言葉を見事に生かしていた。表題句「蚊帳の中星の図鑑をたづさへて」は俳句の手法にしっかりと則っている。「知らぬ草ふたすぢ混じるうまごやし」は細密画を見ているよう。「聖五月羽のごとくに茶葉沈み」「自画像に髭すこし足す青嵐」「塵取りにうつすらと水白木槿」など、季語が浮ついていない句に感心した。良く出来ている25句で、こちらが感心するような作品だった。

各作品の評が終了し、1「静かなる」11「小舟」14「星の図鑑」の中で再検討を進めることとなった。

・大賞作品について

(遠藤委員) やはり見て明らかで。

(岸本委員) 14「星の図鑑」については三人異論無いということで。

(高柳委員) 全員が最高点をつけているというのは珍しい。否定的な意見もほとんど出なかったように思われる。私は14番の「温室が欠伸のやうに続きけり」の比喩は分からなかったが、「衣被或る美しき顎を思ふ」の比喩はなんだか分かる気がした。比喩はギャブ的などころもあるので、このような大胆な比喩の句を出して、理解されれば理解されたで、分からなければ分からない、で良いと思います。強いて分からない句を挙げるとすれば「温室が」の句で、全体的にどれも頂ける句ではないか。

(岸本委員) 「温室が」の句は、ビニールハウスがいくつも並んでいる景ではないかと思ひ、長閑さを感じた。

(高柳委員) それはちょっと分からなかったですが、温室には口もあるのでね。

(岸本委員) 逆に僕は「衣被」と「顎」の関連性が分からなかった。

(高柳委員) この二句に関しての評価は逆ですね。比喩はなかなか感覚で納得できるかどうか落差が大きいので。

・準賞・奨励賞作品について

(高柳委員) 準賞が二つ出せば良いのだが。(例年と比較して評価して議論して頂ければという実行委員の声を受け) 私は11「小舟」を推したい気持ちがある。1「静かなる」の淡い味わいも捨てがたいが、11「小舟」の一つ一つ心に留まるような書き方も奨励したい。

(遠藤委員) 11「小舟」も個性のある作品だが、出来れば 1「静かなる」にも同率に準賞をあげたい。今年は水準が高かった。14「星の図鑑」31「飛べぬ羽」が飛びぬけて質が高かったが、他の作品も同様にレベルアップしていたと感じた。

(実行委員の、大賞に決定した 14『星の図鑑』が非常に優れていたのであれば、それに次ぐ奨励賞が二作品ということもあり得るという提案を受けて)

(岸本先生) 評価がすごく難しい。一句一句何点と決めることは難しいが、私の場合は 25 句の積み重ね。1「静かなる」の方が、25 句全体の平均的な完成度が高いと考え、上位の点を付けた。11「小舟」は良い句も多かったが、やや心配な句もあった。今年は全体的にレベルが高かった。読み手を信じて思い切った句を出して下さったと感じている。31「飛べぬ羽」は評価として準賞に近かったため、辞退が残念。1「静かなる」11「小舟」は奨励賞か。14「星の図鑑」と次点の作品の差が大きく、その次点と更に次点の作品との差は小さいためである。

(高柳委員) 1「静かなる」と 11「小舟」の間に大きな差があるとは思わないので、同じ賞をあげていただければと。

議論の結果、第四回俳句賞「25」大賞は、開成高等学校の 14「星の図鑑」に決定した。また、奨励賞として、海城高等学校の 1「静かなる」、星野高等学校の 11「小舟」が選出された。

1:『太陽の季節』は石原慎太郎の短編小説。第 34 回芥川賞受賞作。1956 年に映画化され人気を博す。

続いて、各委員の選んだ秀逸十句が発表された。

秀逸作品

遠藤由樹子選 秀逸十句

- 1 一人上がれば双六の紙薄き
海城高等学校 一年 南幸佑
- 3 凧や昭和の理髪店の窓
岩手県立水沢高等学校 一年 小野寺羽奈
- 6 ビー玉の中心草の穂の見ゆる
神奈川県立横浜翠嵐高等学校 一年 福田彩月
- 7 長閑さや賽銭箱の前に立つ
群馬県立高崎高等学校 二年 武元気
- 11 枯野道はちみつ飴の溶けてゆく
星野高等学校 三年 磯部美咲
- 14 温室が欠伸のやうに続きけり
開成高等学校 一年 佐々木啄実
- 16 飢餓の子の大き眼や石榴の実
長野清泉女学院高等学校 二年 小林蓮
- 19 冬銀河以外に何もない故郷
高田高等学校 二年 網谷菜穂
- 22 牧場に座りて冬晴を撮りぬ
愛知県立岡崎東高等学校 二年 鈴木空
- 31 東京を隠す雨なり冷奴
開成高等学校 一年 荒川力也

岸本尚毅選 秀逸十句

- 6 読み返す生徒心得今日の秋
神奈川県立横浜翠嵐高等学校 二年 岡本伊万里
- 7 むつごろうの古き巢穴の白さかな
群馬県立高崎高等学校 一年 山岸春貴
- 13 土筆生え春の終焉肌湿る
文教大学付属高等学校 二年 榎原理央
- 14 塵取りにうつすらと水白木槿
開成高等学校 一年 佐々木啄実
- 15 鯛焼の尾鰭ばらして鳩へ撒く
海城高等学校 二年 干川裕輝
- 16 海温の上昇和布ざわざわと
長野清泉女学院高等学校 二年 荒井かな子
- 17 キャラメルを二つ握りて慕参り
星野高等学校 一年 大友結
- 19 荷物みな身を締めつけて蛸蚪生まる
灘高等学校 三年 松本大輝
- 22 城跡に立つや数多の屋根へ雪
愛知県立岡崎東高等学校 二年 田外美緒
- 24 待ち合はせ場所に眺むる花火かな
洛南高等学校 二年 川田美紀

高柳克弘選 秀逸十句

- 6 冬だまた私の知らぬ冬がきた
神奈川県立横浜翠嵐高等学校 一年 福田彩月
- 7 キヤタピラは遅い九月を踏んでゆく
群馬県立高崎高等学校 二年 武元気
- 11 子を宿す猫の波打つ腹と寝る
星野高等学校 三年 野城知里
- 12 春雨や酢飯の味見もそもそと
青森県立八戸高等学校 二年 大久保美咲
- 14 東京や雨の聖樹に肩触れて
開成高等学校 一年 佐伯淳人
- 15 プールサイド瘡蓋の膨らんである
海城高等学校 一年 東口裕弘
- 16 コロナウイルスうつらぬように袋掛
長野清泉女学院高等学校 二年 大日向愛良
- 19 謝れば済むこと多し胡瓜揉
愛媛県立今治西高等学校 三年 八木大和
- 24 何もかもできる気がする跳かな
洛南高等学校 一年 山本泰己
- 31 小児科に天使の時計春休
開成高等学校 一年 荒川力也

最後に、各委員の総評が行われた。

高柳委員の総評

今回は、全体的にレベルが高かった。一位、二位、三位がなかなか接戦でこちらを楽しませてくれた。全体的に句の輪郭がはっきりしている句が多かった。モノがしっかり出ていて、感情をモノにしっかり縁どらせる。それが伝統的な俳句の作り方だが、この賞も時代とともに、関わる人と共に変化していくと思う。モノを主軸にした作り方とは違う作り方も見てみたい。ひたすら観念で押していくとか、情緒をたっぷり出すとか。そういった作り方を拒むわけではないので、どんどん冒険してほしい。モノを出すというセオリーは知っておいて、各チームの良さを活かしてそのセオリーとどう付き合っていくか考えてほしい。こうしなければならぬという決まりはない。新しい時代にはどんな表現が人々の心を写し、人々の心を打つのかは分からない。皆さんが考え、自分で作っていただきたい。それをこちらが普遍性はあるのか、読み継がれるものなのか検討する。実験のつもりでどんどん作って、こちらにぶつけてほしい。

岸本委員の総評

どの作品にも図抜けた句を何句か見ることができた。図抜けた句といっても色々なタイプがあって、一見平凡な風景を一步踏み込んできめ細かな描写をするとか、今まで突き破れなかった俳句の壁を一步突き破ったような句を見ることが出来て嬉しかった。先ほど高柳さんが仰ったとおり、観念的な句や見方によっては危ない句もあっていい。まだまだ狙いどころはたくさんあるのではないかと期待しています。

遠藤委員の総評

今回の三十一篇は読みごたえもあり、水準も高かった。これは、作者の方々が真剣に俳句に向き合うことで身につけた上手さなのだと感じた。ここで取り上げられなかった中にも良い句はたくさんあった。私からの願いは、ほんの少し俳句に深入りして欲しいということ。それぞれのアプローチの仕方でもう一步俳句に踏み込んで貰えたら嬉しい。俳句は必ず応えてくれる。これからの皆さんの作品を楽しみにしています。ありがとうございました。